

場の記録（2026.4.15）

「問いのコミュニティ」的一幕

代表者は、冒頭 15 分の時間を使って、

- 現代世界やビジネスの状況に触れ
- “Collective Conscience”
（集合的良心）の概念を示し、
- それが要請される背景を述べ、
- 「これが成立する条件とは」

という問いを置いた。

参加者たちは、

この冒頭 15 分の語りに対して、
どこに着目し、どこで思考が動いたのかを、
めいめいに述べた。

一人一人、全員が違うことを述べる
結果になった。

その違いは、単なる感想の散乱ではなく、
各自が自分の使っている語やその区別に
自覚的になる契機になった。

たとえば、以下に示す参加者 A の
「対決」と「対立」の区別が、それだ。

1)

参加者 A は、

対決と対立は違うと思っている、
と言った。

どう違うのか、と聞くと、

対立は反目だが、

対決はよりよい方向に向かうためのものだ、と A は述べた。

これに対して代表者は、
それは A さんの作業定義ですね、と言った。

ここで参加者に起きているのは、
知識を教わることではない。
自分の語の分け方、意味づけ方が、
場の中で可視化された。

“ Collective Conscience “
(集合的良心) に関する問いが置かれたのに、
参加者 A には「対決」と「対立」の差が前景化した。
この、いい意味でのずれこそが、
場の働きとなっている。

この場にきた参加者に起きうることは、
第一に、自分の思考が動くこと。
ここでは「対決と対立は違う」という反応がそれだ。

第二に、その動きが、場の中で、
ことばとして位置づけられること。
「それは A さんの作業定義ですね」
という返しが、それである。

問いに正答することではなく、
冒頭の語りに触れたとき、
自分の思考がどこで動くかが現れ、
この返しによって、
A の発話は単なる感想から一段スライドし、
概念的な行為として見えてくる。

2)

“ Collective Conscience “
(集合的良心) が要請される背景の一つに、
「生活や社会における言語実践の荒廃・粗暴化」
(brutalization of language) がある。

ここに反応した参加者 B は、会社の
飲み会の場で起きた経験を語った。

そして会の終盤では、
「安心な場の大切さ、
(言語実践における)
チャーミングなアプローチや
愉快的表現を大事にしたい」
と言った。

ここで代表者は、その発言を
「それは、つまり……」と名づけ直さず、
いま出たことばを、
そのままメモしたらいいですね、
と述べた。

参加者 A の例では、
「対決」と「対立」という
概念の差異への自覚が表に出た。

対して参加者 B の例では、
もっと職場の日常風景に近いところから、
✓ 荒廃・粗暴化した言語実践という
 問題に反応し
✓ 自分自身の発話経験を出し
✓ そのうえで、チャーミングな
 アプローチ、愉快的表現、
 という語を置いた。

こちらは自分の振る舞いの語りから、
語が立ち上がる例だ。

参加者 B が経験したのは、
すでに確立した概念を正確に当てる
ことではなく、自分の体験の中から、
今後の思考の核になりうる語が出て
きた瞬間であった。

このため代表者は、
「それは、つまり……」
と概念回収しなかった。

仮に、ここで代表者が
それは非暴力的コミュニケーションのことですね、
のように名づけ直してしまうと、
B 自身のことばの生成が、
外からの整理で覆われてしまう。

B にとって、この対話は、
「自分の中から出てきた語が、
そのまま保持されてよい」
という経験につながる契機であった。

この場で参加者に起きうることは、
二種類ある。

一つは、
自分の中にすでにあった語の区別が、
作業定義として見えてくること。

もう一つは、
自分の経験から出てきた、
まだ不安定な語が拙速に回収されず、
その後の思考の核として保持されること。

B の「チャーミングなアプローチ」や
「愉快的表現」は、後者にあたる。

これらの語は、
まだ定義され切っていない。
しかし、だから弱いのではない。
むしろ、その未定義のままの語が、
B にとっては、このあと考えるべき核になる。

A と B を並べると、かなりはっきりする。

参加者 A では、語の差異が自覚化された
参加者 B では、語の萌芽が保持された

どちらにも共通しているのは、

参加者自身のことばの動きが、
その人の側に返っていく、
ということだ。

参加者は自分の思考や経験から出てきた語を、
すぐに整理・回収されるのではなく、
そのまま保持され、
次に考えるための核として持ち帰る。

その語は、
日々の仕事や生活実践の中で、
あらためて問い直されていく。

3)

“ Collective Conscience “ という概念にふれた参加者 C は、
会の終盤に、次のことを語り出した。

C は、ある組織の役員だが、
人々が正義を振りかざすことが増え、
一方、他人の痛みに対する感受性が弱化している、
と述べた。

代表者はこれに対し、
「人々が」と仰いましたが、
職場ではどうなのですか、と聞くと、
「それが、すごく増えてるんです」と
C は述べた。

代表者はそこで、
他人の痛みに対する感受性の大切さは、
リチャード・ローティも近いことを述べている、
とだけ添えた。

ここで参加者 C に起きているのは、
まず、概念に対する反応の重心が、
社会一般の印象から、
自分の職場の現実へ移ることだ。

Cの語りは一般論のまま漂わず、
C自身が関わっている現場へ移行した。

これにより、
Collective Conscience という語が、
社会評論の材料ではなく、
職場の感受性の減耗という実際に触れる語として働き始めた。

参加者 A、B、C の経験を並べると、

A：語の差異が自覚化される

例 対決／対立

B：まだ不安定な語の萌芽が保持される

例 チャーミングなアプローチ、愉快的表現

C：大きな概念が、自分の現場の現状へ接続される

例 Collective Conscience と 職場における感受性の弱化

この三つは、似ているようで違う。

Aは区別、Bは萌芽、Cは接続だ。

Cの例では、

代表者はローティに触れたが、

それを大きく展開してはいない。

つまり、学説や思想の側へ引き込むのではなく、

Cの現場感覚が孤立した思いつきではない、

という程度に補助線を引いた。

この抑え方によって、

Cの発話は、自分の職場を見つめ返すことばとして保たれている。

4)

参加者 D は、最近、読書仲間と世界史を読み返しているという。

そこで、「人権」概念の誕生、そして市民革命に着目したことを述べた。

代表者は、

“ Collective Conscience “（集合的良心）要請の背景としてあげた
「職場における相互尊重規範の低下」（Workplace Incivility）に触れ、
この概念（Incivility）の中に、
“civil”という要素が含まれていることを述べた。
Dは、「あっ」という表情をした。

ここで起きたのは、知識の追加というより、
別々に持っていた線が一本につながることだ。

Dの例では、
市民革命や人権概念への関心が、
Workplace Incivility と civility という語を媒介にして、
現代の相互尊重規範の低下と結び直されている。

Dは、完成した議論を展開したのではなく、
語が示唆する連関をつかんだ。

参加者 A、B、C、D を並べると、
違いは明確だ。

- A：語の差異が自覚化される
- B：まだ不安定な語の萌芽が保持される
- C：大きな概念が自分の現場へ接続される
- D：別の文脈にあった知が、その場の概念によって結び直される

Dは、
Aのような区別でも、
Bのような語の萌芽でも、
Cのような現場への接続でもない。

Dでは、知の連結が起きている。

しかも、その連結は、
代表者が「つまりこういうことです」
と説明して完了させたものではない。

A、B、C、Dを見ると、
この場では、

単に考えることなく、
自分の語・経験・現場・知が、
それぞれ別の仕方で動き出している。

5)

参加者 E は、
“ Collective Conscience “
(集合的良心) が成り立たないのは、
内集団・外集団と関係しているのではないか、
と述べた。

代表者はこれに対して、
in-group, out-group という理論的な
認識に寄せて考えたのですね、
と返した。

すると、参加者 A が、
自分の所属先には、
一般職と総合職という
区別があるのだが、
そこに「分断」があり、
一般職の人たちは、
目の前で総合職が困っていても
動かない、という話をした。

この前に、参加者 D が、
“ Collective Conscience “
(集合的良心) が要請される
背景の一つに、
「他者を支える行為の生起不全」
(Failure of Supportive Action)
とあるが、
わたしはいろいろな人に支えられて
きたので、そういうものなのかなあ、
と思った、と述べていた。

代表者はそこで、参加者 A が語った、
一般職・総合職の一件を指し、

これが
「他者を支える行為の生起不全」の
一例かもしれませんね、とだけ述べた。
Dは、ああ、という表情を示し、
自分に見えていたものが狭かった、と語った。

他方、A に対して代表者は、
「いまお話になったその現象を
『分断』といわず、
別のことばで表現できますか？」
と聞いた。

これは単に「いろいろな意見が出た」という話ではない。
参加者どうしの発話が、
別の参加者の理解を更新し、
さらに語の水準で再検討されている。

参加者 E に起きているのは、
D の例に近く、既存の知の転用だ。

ただし D が語の連関（市民、人権、civil）に気づいたのに対し、
E はよりはっきり、既知の理論を
この場の問いへ持ち込んでいる。

次に、それを受けて A が、
自分の所属先における
一般職／総合職のあいだの分断
についてエピソードを出した。

ここで重要なのは、E の理論的枠が、
A の側で職場の具体例を呼び出したことだ。

つまり、ひとりの参加者の理論的応答が、
別の参加者の現場経験を前に出している。

ここで、場は個別応答の並列から、
発話どうしが互いを動かすフェイズへ移っている。

また、Dは、自分が支えられてきた記憶から、「他者を支える行為の生起不全」という背景をまだ十分にはつかみきれていなかった。しかしAの具体例を媒介にしたとき、その語が、具体的な出来事として見えはじめた。

さらに代表者はAに、その現象を「分断」と言わず、別のことばで表現できますか、と返している。

これは、Aの話をもそのまま社会問題用語へ固定しない応答である。「分断」という既成の大きな語で済ませず、その現象に対して、もう一段、ことばを選び直すことを求めている。

つまり場は、具体例を出して終わるのでも、理論名を当てて終わるのでもなく、語の再選択の水準まで進んでいる。

ここまでの参加者A～Eをまとめるなら、こうなる。

- A：語の差異が自覚化される
- B：まだ不安定な語の萌芽が保持される
- C：概念が自分の現場へ接続される
- D：既存の知が新しい連関で結び直される
- E：理論的枠が他者の現場経験を呼び出す

Eの例によって見えてくるのは、この場では、参加者たちは単独で考えているのではなく、他者の発話を媒介にして自分の理解が更新され、語が変化するということだ。

単なる会話でも、感想交換でもなく、
概念・経験・理解・命名が、
参加者どうしのあいだで連鎖的に動く場として機能している。

最後に、今回のやりとりを見ると、
代表者は参加者の発話を

- ✓ 正誤判定していない
- ✓ ひとつの結論へ収束させていない
- ✓ 代表者の側の正解へ導いていない

むしろ、代表者は発話の流れに応じて、
A の語の区別を作業定義として返す
B の語を名づけ直さず、そのままメモするよう促す
C の社会一般論を現場へ戻す
D の既存知を新しい連関へ開く
E の理論的枠が A の現場経験を呼び出した流れを拾う
A の「分断」を別のことばで言えるか問う
というように、閉じない方向へ流れを保っている。

今回起きているのは、

- ✓ 現象をどう呼ぶか
 - ✓ 差異をどう言い表すか
 - ✓ まだ生成中の語をどう保持するか
 - ✓ 自分の経験をどの概念に接続するか
- という水準まで含む、ことばの選び直しである。

このように参加者は、
ここでの発話や対話を通じて、
既成語で反射的に済ませるのではなく、
どの語で捉えるかを問いつつ、
自分のことばを試し、
日々の言語実践の場へ還っていく。

本制作物は、閲覧・保存・印刷・共有いただけます。

ただし、文章・構成・図版を、出典を示さずに転載・改変・転用することはお控えください。